「課題対応能力」を育む小学校低学年におけるキャリア教育の展開
― 道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」を通して ―

廿日市市立阿品台東小学校　小田　博美

研究の要約

本研究は，道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」を通して「課題対応能力」を育む小学校低学年におけるキャリア教育の展開について考察したものである。文献研究から，小学校低学年では人々との関わりを広げながら，目的をもって〔情報の収集〕〔整理・分析〕を行うことが重要であると考えた。そこで，道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」に取り組むことで，児童が課題意識をもち課題の解決に向けて活動できるようにした。その中で，児童はインタビューカードや情報を収集する活動で目指すべき姿を明確にする調べの達人カードを活用して多様な対象から情報を収集し，思考ツールを活用して情報の整理・分析をすることができた。このことから，小学校低学年のキャリア発達課題を踏まえ，道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」を行うことは「課題対応能力」を育む上で有効であると分かった。

キーワード：課題対応能力　道徳の時間と特別活動との関連　情報の収集　整理・分析

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成23年，以下「答申」とする。）では，キャリア教育で育成すべき力として，「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の４つの能力によって構成される「基礎的・汎用的能力」を示した。この「基礎的・汎用的能力」の一つである「課題対応能力」は，仕事をする上での様々な課題を発見・分析し，適切な計画を立ててその課題を処理し,解決することができる力であり,自らが行うべきことに意欲的に取り組む上で必要なものであると示されている。

所属校の第２学年キャリア教育アンケート結果から，各能力の要素を比較すると，「課題対応能力」に含まれる情報の理解・選択・処理等の評価が最も低く，課題があると分かった。また，平成27年度「基礎・基本」定着状況調査の「課題発見・解決学習」に関する児童質問紙調査（以下，児童質問紙調査とする。）の結果においても，〔情報の収集〕に関する肯定的評価が最も低く，広島県全体としても課題となっている。

これらのことから，本研究では，児童が課題の解決に向けて，課題意識をもって〔情報の収集〕や〔整理・分析〕ができるよう，道徳の時間と特別活動との関連を図った上で，児童が課題の解決に向けて探究的に活動する「課題発見・解決学習」を進める。

小学校低学年において，「課題対応能力」を育むことに独自性があると考え,本研究題目を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　所属校低学年における育成したい能力や態度

「基礎的・汎用的能力」について，所属校の児童実態を把握するため，第２学年の児童37人にアンケートを実施した。アンケートの質問項目は，文部科学省「小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉」（平成23年，以下「手引き」とする。）の「キャリア教育アンケートの一例」を基に，①から⑫の質問項目を４段階評定尺度法で行った。アンケートの質問項目と「基礎的・汎用的能力」の関係，所属校第２学年の事前アンケート結果を次頁の図１に示す。

事前アンケートの結果，「課題対応能力」の肯定的評価が67.6％であり，他の能力と比較して低い値であった。また，各能力における要素を比較すると，「課題対応能力」に含まれる情報の理解・選択・処理等の項目の肯定的回答が最も低く，59.0％であった。児童質問紙調査の結果，「課題発見・解決学習」

の〔情報の収集〕に関する設問「授業では，課題を解決するために，進んで，資料を集めたり取材をしたりしています。」の肯定的評価は50.9％，「授業では，課題を解決するための情報を集める前に，どのような方法だと必要な情報を集めることができるのかを考えています。」の肯定的評価は60.4％であった。これらは，児童質問紙調査のうちでも１番目と３番目に低い数値であり，広島県においても課題となっている。また，「課題発見・解決学習」の〔整理・分析〕に関する質問２項目に対する肯定的評価は71.4％と75.0％であり，高い数値とは言い難い。

これらのことから，本県，所属校共に，〔情報の収集〕〔整理・分析〕に課題があると考えられる。

キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書―もう一歩先へ，キャリア教育を極める―（2014）では，「課題対応能力」に関連する諸能力として，中央教育審議会が示した学士力の問題解決力を挙げている。問題解決力とは，「問題を発見し，解決に必要な情報を収集・分析・整理し，その問題を確実に解決できる。」[1)]と示されている。

以上のことから，所属校第２学年において育成したい能力や態度を，分からないことや知りたいことがある時に，解決に必要な情報を収集・分析・整理し，解決することができる「課題対応能力」とする。

２　小学校低学年におけるキャリア教育について

「答申」は，「『キャリア教育』とは，『一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育』である。」[2)]と定義している。また，キャリア教育は幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが必要であり，様々な教育活動を通して実践されるものであると示している。

「手引き」は，小学校におけるキャリア教育は，全教育活動の中で６年間を通して意図的・継続的に推進し，人や社会などと関わる体験活動を，身近なところから徐々に広げていくことが大切であると示している。また，小学校低学年のキャリア発達課題として，身の回りの事象への関心を高めるために，様々なことや人々との関わりを広げながら，積極的に関わっていこうとする態度を育むことや，身近な人々と関わることの楽しさを味わわせることについて求めている。さらに，発達課題を踏まえたねらいの例として，世話になった人々に感謝することなどが挙げられている。

これらのことから，小学校低学年におけるキャリア教育とは，社会的・職業的自立に向けより基礎的な能力を育てるために，キャリア発達を踏まえ，様々なことや人々との関わりを広げ，積極的に関わりながら進めることが大切であると考える。

これらのことや児童実態を踏まえ，本研究では世話になった人々に気付き，人々との関わりを広げながら情報の収集を行う学習を展開していく中で，「課題対応能力」を育むこととする。

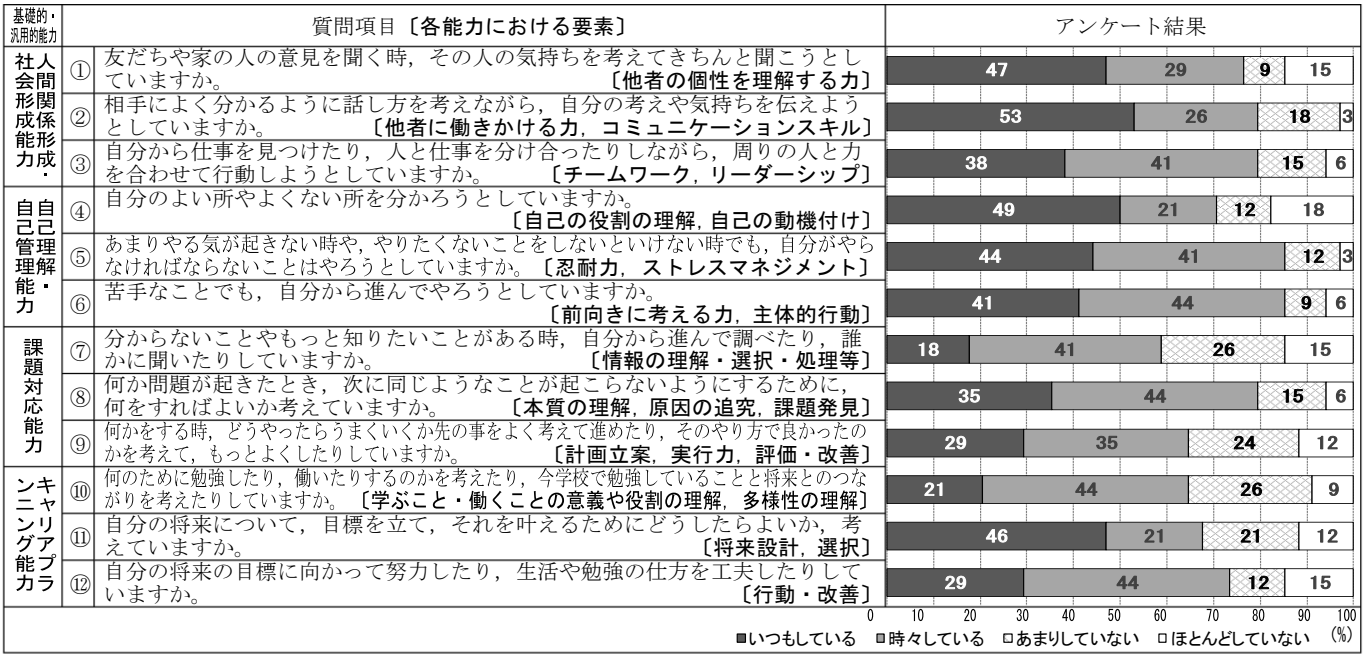


図１　所属校第２学年児童のキャリア教育アンケートの結果（事前）

３　道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」について

(1) 道徳の時間と特別活動との関連を図るとは

道徳の時間と特別活動との関連について，小学校学習指導要領解説道徳編（平成20年，以下「解説」とする。）には，道徳の時間での指導が特別活動における具体的な活動場面の中に生かされ，具体的な実践や体験などが行われることによって，道徳的実践力と道徳的実践との関連を図る指導が効果的に行われることになると示している。

押谷由夫（1994）は，　道徳の時間は，各教科や特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら道徳的実践力を育成する時間であり，育成された道徳的実践力を具体的に行為として表したり，行為の中に反映させたりする場と機会がなければ，道徳的実践に結びつけることはできないと述べている。

これらのことから，道徳の時間と特別活動との関連を図るとは，道徳の時間に育成された道徳的実践力を特別活動における具体的な活動場面の中に生かすことで，道徳的実践力と道徳的実践を結び付けることにつながると考える。

ア　道徳の時間に育成される道徳的実践力とは

解説は，道徳的実践力とは，人間としてよりよく生きていく力であり，一人一人の児童が道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め，将来出会うであろう様々な場面，状況においても，道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し，実践することができるような内面的資質を意味し，道徳的心情，道徳的判断力，道徳的実践意欲と態度を包含するものであると示している。

赤堀博行（2010）は，道徳的実践力とは，人間としてよりよく生きていく力であり，子供たちの将来において生きて働く力であると述べている。また，道徳的実践力を育成するためには，道徳的価値を深めることが必要で，人間としてよりよく生きる上で大切な道徳的価値を自分のこととして深く感じたり考えたりする学習が大切であると述べている。

これらのことから，道徳的実践力とは，人間としてよりよく生きていく力であり，道徳的価値を自分のこととして深く感じたり考えたりする学習によって育むことが大切であると考える。この道徳の時間に育成された道徳的実践力を発揮する場として，北村文夫（2010）は特別活動を挙げている。

イ　特別活動について

小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年）は，学級活動（１）学級や学校の生活づくりについて，児童の実践を前提とし，児童自らが気付き関心をもつものであって，児童が共同して具体的に解決の方法を見いだせるものが望ましいと示している。

杉田洋（2013）は，よりよい生活づくりのための学級会について，問題発見，話合い，実践・実行，振り返りのサイクルを示し，学級会における問題発見の過程の重要性を述べている。

木内悦雄（2012）は，集会活動の基本的な考え方として，企画の段階から子供の発意・発想を大切にし，話合いの活動を通して，自分たちで計画し役割分担をして，協力し責任をもって準備し，運営する過程を大切にしなければならないと述べている。

これらのことから，特別活動はよりよい生活づくりのために児童の発意･発想を大切にした問題発見，話合い，計画，準備，実践を行い，振り返ることが重要であると考える。

前述したことから，本研究においては，児童の発意・発想から道徳的実践の場を設定し，道徳の時間に高まった日ごろ世話になっている身近な人々への感謝の気持ちを具体的な言葉や行動に表そうとする活動を特別活動において展開していくこととする。

(2) 「課題発見・解決学習」について

ア 「課題発見・解決学習」とは

広島県教育資料（平成27年度，以下「教育資料」とする。）では，「主体的な学び」を促す教育活動の一つとして，「課題発見・解決学習」を挙げ，児童生徒が自ら課題を見付け，課題の解決に向けて探究的な活動をしていく学習であると示している。そして「課題発見・解決学習」における活動には，〔課題の設定〕〔情報の収集〕〔整理・分析〕〔まとめ・創造・表現〕〔実行〕〔振り返り〕などがある。その中で特に〔課題の設定〕〔整理・分析〕などの充実が求められている。〔課題の設定〕では，児童生徒が自ら課題意識をもち，その意識が連続発展することが大切であり，〔整理・分析〕では，収集した情報の比較・分類するなどの児童生徒の思考する活動を促すなどの取組が必要であると示されている。

これらのことから，「課題発見・解決学習」とは，児童生徒自らが課題を見付け，その課題の解決に向けて主体的・探究的に活動をしていくことができる学習であると考える。

本研究においては，道徳の時間と特別活動との関連を図ることで，児童が課題意識を連続発展できるようにし，課題の解決に向けた「課題発見・解決学習」を展開する中で〔情報の収集〕〔整理・分析〕の活動を促していくこととする。これらの活動は，

70頁で述べた低学年のキャリア発達課題を踏まえ，人々との関わりを広げながら行うこととする。

イ　〔情報の収集〕について

河村有希絵（2014）は，情報収集の最終目的は何で，情報がどう活用されるのかが情報収集の「課題」であるとし，情報収集の前にしっかりとその「課題」を設定し，情報収集作業を進める中でも見失わないようにすることの重要性を述べている。

「教育資料」には，〔情報の収集〕について，調べ方について考える場を設けたり，複数の調べる方法を提示して選択できるようにしたりすること，他者と協働して取り組む活動を取り入れるようにすることなどを示されている。

これらのことから本研究では，情報の収集の目的を児童の発意から日ごろ世話になっている人々に感謝の気持ちを伝えることと設定する。その課題解決のために調べ方を考える場を設け，〔情報の収集〕を促す。その際，インタビューの仕方を考えるワークシート（以下，インタビューカードとする。）を活用することで，人々との関わりを広げながら情報の収集を進められるようにする。また，情報を収集する活動で目指すべき姿が明確になるように，関西大学初等部（2012）が実践した考える達人カードを参考に，調べの達人カードを作成し，児童が学習に取り組みやすい環境を整える[(1)]。

ウ　〔整理・分析〕について

「教育資料」は，〔整理・分析〕について「蓄積した情報を整理・分析して，思考する活動」[3)]と示している。

波頭亮（2004）は，「つまり『分析』とは，一義的には『要素に分けること』であり，実際の行為としては『収集した情報を要素に分ける作業を通して，目的に合致した意味合い（メッセージ）を得ること』と理解すればよい。」[4)]と述べている。また，分析を「論理的思考」を活用して正しい結論を得ようとする最も現実的な行為と述べている。

これらのことから，〔整理・分析〕とは，目的に合致した情報を得るために，収集した情報を要素に分ける作業を通して，思考することであると考える。

田村学（2013）は思考力を育成する方法に思考ツールを挙げ，これにより情報が可視化され思考が方向付けられると述べている。また，思考ツールの一つである表は，複雑な事柄について，二つの視点を立てて整理するために用いると述べている。

そこで，本研究では，〔整理・分析〕において，収集した情報から目的のために必要な事柄を得るために思考ツールを活用し，児童の思考を促していくこととする。

(3)　道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」とは

これまで述べてきたように，本研究では，道徳の時間と特別活動との関連を図り，道徳の時間において高まった道徳的実践力を児童自らが具体的な行為として表す活動を特別活動において展開していくものとする。児童が目的をもって活動を行う中で，課題解決のために必要な〔情報の収集〕や〔整理・分析〕などを行いながら「課題発見・解決学習」を展開していく。詳しくは図２に示す。

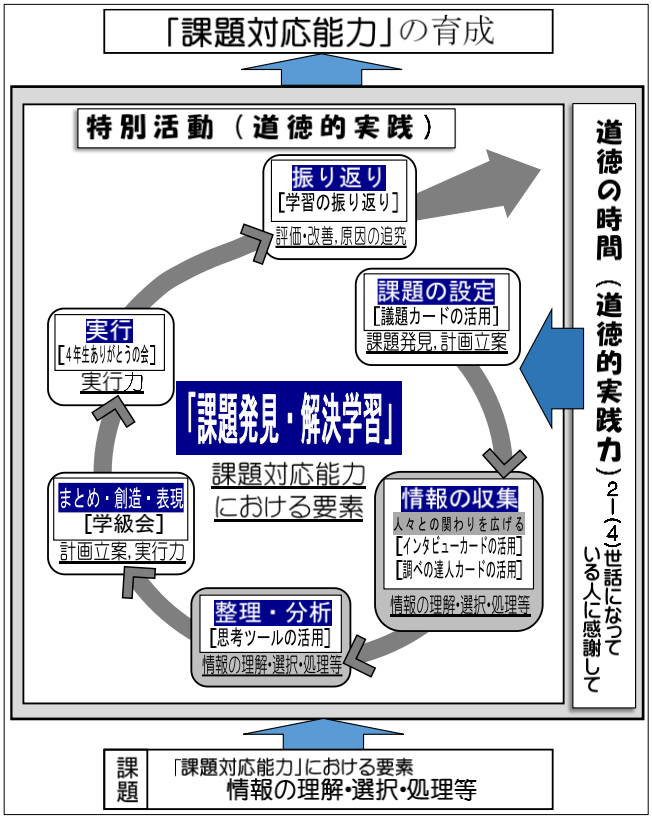


図２　本研究における構想図

Ⅲ　研究の仮説及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」を通して，児童の〔情報の収集〕を促し，思考ツールを活用して情報の〔整理・分析〕を行うことで「課題対応能力」を育むことができるであろう。

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法について，次頁表１に示す。

表１　検証の視点と方法

	検証の視点	方法
1	道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」によって，情報の収集が促されたか。	・道徳アンケート ・わたしたちの道徳 ・議題カード ・ワークシート ・振り返りカードの自己評価及び記述内容
2	思考ツールの活用によって，情報を整理・分析することができたか。	・ワークシート ・振り返りカードの自己評価及び記述内容
3	「課題対応能力」は育まれたか。	・キャリア教育アンケート（事前・事後）

３　検証のためのアンケート

「課題対応能力」が育まれたかを検証するため，取組の前後に「キャリア教育アンケート」を実施する。アンケートは「手引き」の「キャリア教育アンケートの一例」を基に作成し，４段階評定尺度法と記述により回答させる。

Ⅳ　研究授業について

１　研究授業の内容

○　期　間　平成27年11月30日～12月21日

○　対　象　所属校第２学年（２学級37人）

２　研究授業の概要

本研究授業の概要を図３に示す。

道徳の時間において，日ごろ世話になっている人々に気付き，その人たちに感謝の気持ちを表そうとする態度を養う学習を行った。この授業で，児童がピア・サポート活動で世話になっている第４学年の存在に気付き，「４年生にありがとうの気持ちを伝えて，喜んでもらえる会がしたい」という児童の発意から，特別活動において「４年生ありがとうの会」（以下，「ありがとうの会」）を開くこととした。「ありがとうの会」の内容を決めるために，学級会において「ありがとうの会でどんな遊びをするか決めよう」という議題が立てられた。遊びを考える際，条件を提示することで，既存の知識だけでなく調べることの必要性を感じさせ，情報を収集する活動へとつなげた。また，情報の収集をするために，児童と共に調べる方法やインタビューの仕方を考え，調べの達人カードを活用した。この活用により，尋ね方や目指す姿が明確になり，情報の収集が促された。そして，調べたことから「ありがとうの会」に適した遊びについて，思考ツールを活用して自分の考えを整理させ，学級会において話合いを行った。なお，あらかじめ「課題発見・解決学習」の過程を自分たちで行っていくことを児童と確認し，学習を展開した。

Ⅴ　研究授業の分析と考察

１　道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」によって，情報の収集が促されたか

(1) 道徳の時間と特別活動との関連を図ることができたか

ア　道徳の時間から

道徳の時間に関わる事前アンケートで，児童が日ごろ世話になっている人々について調査を行った。その結果，多くの児童は家族，先生，地域ボランティ

		児童の活動		「課題発見・解決学習」の過程	付けたい「課題対応能力」の要素
11／30（月）	道徳の時間 〔主題名〕 世話になっている人に感謝して ２－（４） 〔資料〕 「へんとうせんのとき」 （出典：「小学校どうとく２　かがやけみらい」学校図書） 〔ねらい〕 寝ずに看病してもらったのぶ子の気持ちを考えることを通して，日ごろ世話になっている人々の存在に気付き，その人たちに感謝の気持ちを表そうとする態度を養う。 〔学習活動〕 １　日ごろ身近で世話になっている人々について，想起する。 ２　「へんとうせんのとき」を聞いて，話し合う。 ３　日ごろ身近で世話になっている人々について，振り返る。 ４　感謝の気持ちを伝えたい人々について考え，今後に生かそうとする。「わたしたちの道徳」p.87に記入する。	12/１（火）	・議題カードを書く。	課題の設定	課題発見
		12/２（水）	・議題を決定し，「４年生ありがとうの会」でしたいことを考える。		
		12/３（木）	・計画委員が活動計画と話合いの柱について話し合う。 ・学級全体で，活動計画を確認し，活動で付けたい力を考える。		計画立案
		12/７（月）	・「４年生ありがとうの会」ですることを決め，いろいろな「遊び」を調べる方法を考える。	情報の収集	情報の理解・選択・処理等
		12/７（月）～12/10（木）	・遊びを調べ，調べたことを学級会コーナーに書く。	整理・分析	
		12/11（金）	・調べたことを基に，学級会に向けて，自分の考えを整理する。		
		12/14（月）	特別活動　学級活動（１） ・学級会を開き，話合いをする。		
		12/14（月）～12/18（金）	・係の活動計画を立て，準備をする。	まとめ・創造・表現	計画立案実行力
		12/21（月）	特別活動　学級活動（１） ・「４年生ありがとうの会」をする。	実行	実行力
			・自己評価，全体評価をし，成果と課題を出し合う。	振り返り	評価・改善原因の追究

図３　本研究授業の概要

アなどに世話になっていると感じているが，学校で世話になっている上級生の存在に気付いている児童は１人であることが分かった。

道徳の時間において，前頁図３に示す授業を行った。導入時，より多くの世話になっている人々に気付けるよう，学校生活での写真を提示した。その際，児童は上級生に毎日縦割り掃除で世話になっていることや行事などで助けてもらっていることなど，それぞれの上級生との関わりに気付くことができた。

道徳の時間の終末では，全児童が「わたしたちの道徳」に「ありがとう」を伝えたい人を記入することができた。このことから，道徳の時間において，感謝の気持ちを表そうとする道徳的実践力が育まれたと考える。

イ　議題カードから

道徳の時間の学習後に書いた議題カードに，48.5%の児童が「感謝の気持ちを伝えることがしたい。」と記述していた。さらに，そのうちの47.0%が世話になっている第４学年に感謝の気持ちを伝えたいと記述していた。これまで感謝を伝えることについて議題カードに提案されたことはなかったが，道徳の時間に道徳的実践力が育まれ，児童の感謝を伝えようという気持ちにつながったと考える。

ウ　振り返りカードの記述・自己評価から

前頁図３に示す12月７日～12月21日の活動で使用した６回分の振り返りカードには，それぞれに「次の活動に向けての気持ちや思い」を書く自由記述欄を設けた。その記述欄に，70.2%の児童が第４学年に感謝を伝えることを意識した記述をしていた。

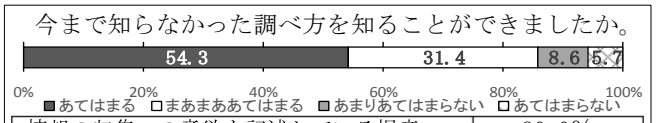
また「ありがとうの会」実行後の振り返りでは，全児童が「ありがとうが伝えられたと思う。」と自己評価していた。さらに，79.4%の児童が「４年生が喜んでくれてうれしかった。」などと，感謝を伝えられたと実感している記述が見られた。

前述ア，イ，ウのことから，道徳の時間によって身近で世話になっている人々の存在に気付き，感謝を伝えようとする気持ちを育むことができたと考える。また，その高まった気持ちを実践する場において第４学年に感謝を伝えることができ，道徳の時間と特別活動との関連を図ることができたと考える。

(2)「課題発見・解決学習」を通して情報の収集が促されたか

ア　ワークシート，振り返りカードの記述・自己評価から

児童と共に情報の収集方法について考えた際の振り返りカードの記述内容と，情報の収集方法の理解についての自己評価を図４に示す。図４の結果から，85.7%の児童が今まで知らなかった情報の収集方法について知り，80.0%の児童が「調べてみたい。」という意欲をもつことができたと分かる。



情報の収集への意欲を記述している児童	80.0%
児童の記述内容	
・４年生をよろこばせられるあそび，ゲームをたくさんしらべたい。 ・６年生がよく知っていそうだから，６年生に聞こうかなと思った。 ・こんなに聞いたりしらべたりできるんだと思った。人に聞いてしらべたい。	

図４　情報の収集に関する児童の自己評価と記述内容

日付	方　　法
12/７	学習を生かし，主体的に情報の収集活動が促されたかを観察する。
12/８～10	上記に加え，インタビューカード，調べの達人カードを活用する。

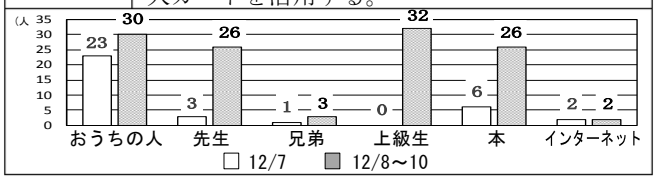


図５　児童の情報を収集する対象の変化

次に，児童の情報を収集する活動の様子について述べる。なお，活動の際，図５に示す二通りの方法で変容を追った。

12月７日の情報を収集する活動の様子を観察した結果，情報の収集を行った児童が35人中24人おり，そのうちの23人が「おうちの人」に聞いて調べていた。このことから，調べる方法について考え，調べる意欲をもったことで，情報の収集が促されたと考える。しかし，学習した新たな調べ方での実践には結び付きにくかった。そこで，インタビューカードと図６に示す調べの達人カードを活用した。

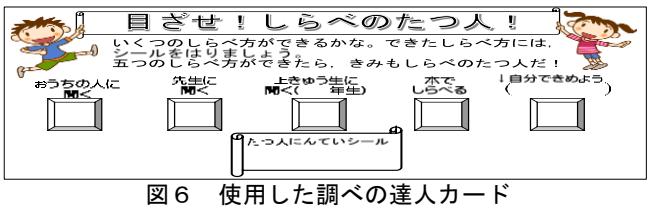


図６　使用した調べの達人カード

12月８日～10日は情報を収集した対象として「先生」が３人から26人，「本」が６人から26人，「上級生」が０人から32人に増加した。インタビューカードや調べの達人カードにより，尋ね方や目指す姿が明確になったことで情報を収集しやすくなり，情報を収集する対象が多様になったと考える。

情報を収集する活動後の児童の自己評価につい

て図７に示す。

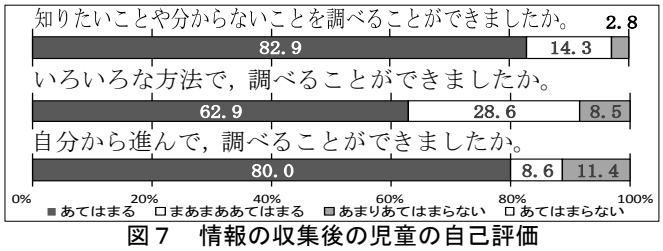


図７　情報の収集後の児童の自己評価

児童の97.2%が「知りたいことや分からないことを調べることができた。」と肯定的な回答をした。

あまりあてはまらないと答えた児童の振り返りカードには，「おうちの人や先生に聞いたが，突然聞いても,うまく答えてもらうことができなかった。調べることは楽しかった。」と記述しており，調べようとする意欲をもって活動をしていたことが分かった。また，「いろいろな方法で調べることができた。」は90.5%，「進んで調べることができた。」は88.6%の児童が肯定的な回答をし，「ありがとうの会」に向けて，必要な情報を多様な方法でしかも意欲的に調べることができたと考える。

イ　児童観察から

前頁図５に示す情報を収集する対象の変化が少なかったＡ児の変容について経過を追う。

Ａ児は，12月７日に「おうちの人」「本」，12月８日～10日には，新たに第５学年に尋ねて情報の収集を行い，情報の収集の対象は一つしか増えなかった。しかし，70頁図１に示すキャリア教育アンケートの質問項目⑦の自己評価は否定的評価２から肯定的評価４へと２段階上がった。また，同項目⑦の記述アンケートに事前は「どう調べたらよいか分からない。」と答えていたが，事後は「もっと知りたいことがある時に，聞いたり調べたりするといろんなことを知ることができる。」と記述していた。さらに，振り返りカードには，「初めて５年生に聞くことができた。次は先生にも聞きたい。」と記述していた。このことから，Ａ児はこれまでどのように人に尋ねてよいか分からなかったが，インタビューカードを活用したことで，人から情報を得ることができ，情報を収集することのよさを実感できたものと考える。また，そのことが次への意欲につながったと推察する。

前述ア，イの結果から，情報の収集方法について考え，目指すべき姿を明確に示すことで，調べる活動が促され，児童の情報の収集方法が多様になり，情報の収集が促されたと考える。

２　思考ツールの活用によって，情報を整理・分析することができたか

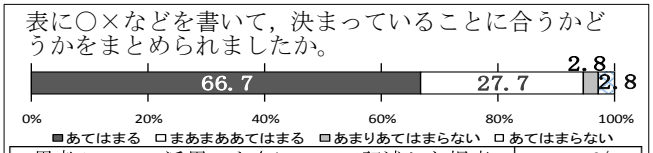
(1) 思考ツールを活用することで，情報を整理・分析することができたか

児童が収集した情報から，必要な情報を選択するために使用した思考ツールを図８に示す。思考ツールの縦は「ありがとうの会」を行う上で決まっている条件，横は児童が考えた遊びを表す。

	ハンカチおとし	花いちもんめ	算数じゃんけん
えい語ルームでできる	○	○	○
１５分間でできる	○	○	○
じゅんびがかんたん	○	○	○
ペアの４年生とできる	×	△	○

図８　使用した思考ツール

児童が思考ツールを活用することで，情報を整理・分析することができたかについて，児童の振り返りカードの自己評価と記述内容を図９に示す。



思考ツールの活用のよさについて記述した児童	86.1%
児童の記述内容	
・はじめて○×をつけたけれど，頭で考えるよりも分かりやすくなり，また○×をつけて考えてみたいと思った。 ・どれができてできないのか，早く見分けがついた。 ・はじめはできると思ったけど，○×をつけたらできないと分かった。	

図９　情報の整理・分析についての児童の自己評価と記述内容

児童の 94.4%が,「表に○×などを書いて,決まっていることに合うかどうかをまとめられた。」と自己評価をしている。また，86.1%の児童が思考ツールに○×などを書くことで「分かりやすくなった。」と記述した。さらに，中には「次も使ってみたい。」と感想をもった児童もおり，思考ツールを活用するよさを感じることができたと考えられる。

これらのことから，思考ツールの活用によって，情報を整理・分析することができたと考える。

(2) 情報を整理することで，自分の考えをもつことができたか

児童が情報を整理することで，自分の考えをもつことができたかを，ワークシートの記述から検証した。記述内容の段階と視点，学習の到達人数を次頁表２に示す。

ａ段階の児童は，思考ツールに整理したことを理由に挙げ，考えを記述することができており，自分

の考えをもつことができたと考える。ｂ段階の児童は，考えを書くことはできているが，思考ツールに整理したことには触れず，別の理由を挙げて自分の考えを記述していた。しかし，選んだ遊びは思考ツールに整理したことを基にしており，情報を整理することで自分の考えをもつことができたと考える。

これらのことから，思考ツールを活用し，情報を整理することは，自分の考えをもつために有効であったと考える。

表２　記述内容の段階・視点と学習の到達人数

段階	視　　点	学習の到達人数
a	自分の考えと，整理した情報を基にした理由の記述がある。	25
b	自分の考えとその理由の記述がある。	9
c	自分の考えとその理由のどちらかの記述がある。	1
d	自分の考えとその理由のどちらの記述もない。	1

３　「課題対応能力」は育まれたか

「課題対応能力」が育まれたかを検証するために，キャリア教育アンケートを実施し，取組の事前と事後の各能力を構成する要素に係る質問項目の平均値と，ｔ検定の結果について図10に示す。

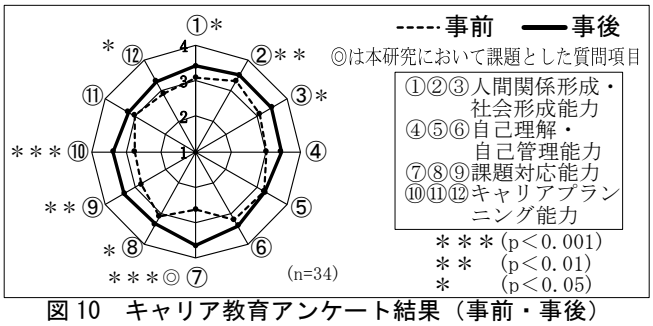


図 10　キャリア教育アンケート結果（事前・事後）

この結果から，「課題対応能力」に係る質問項目⑦⑧⑨の平均値はいずれも上昇している。特に，⑦の情報の理解・選択・処理等の平均値は，2.85から3.65へと0.8上昇した。さらに，「課題対応能力」に係る質問項目⑦は（$p<0.001$），⑧は（$p<0.01$），⑨は（$p<0.05$）の有意な差が見られた。

以上のことから，道徳の時間と特別活動との関連を図った「課題発見・解決学習」を通して，「課題対応能力」が育まれたと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　研究の成果

道徳の時間で児童は多くの人々に世話になっていると気付き，感謝の気持ちを伝えようとする道徳的実践力を養うことができた。そして，その高まった道徳的実践力を実践する場を特別活動において設けることで，児童は「ありがとうの会」に向けて「課題発見・解決学習」に取り組み，情報の収集・整理・分析を行うことができた。その際，インタビューカードや調べの達人カードを活用することで，児童は多様な人から情報を収集することができた。また，思考ツールを活用して情報を整理したことで，目的に合った遊びを選び，自分の考えをもつことにつながったと考える。

小学校低学年のキャリア発達課題を踏まえ，人々との関わりを広げ，積極的に関わりながら「課題発見・解決学習」を行ったことにより「課題対応能力」を育むことができたと考える。

２　今後の課題

児童は道徳の時間と特別活動との関連を図ることで目的をもち，情報の収集・整理・分析ができたが，学級会で話し合う際に，自分たちがやりたい遊びに目が向き，当初の目的からずれてしまった児童がいた。児童がより主体的に「課題発見・解決学習」に取り組むためには，毎時間目的を確認して意識させる指導を行い，継続させることが必要であった。

〔情報の収集〕に関して，今回は低学年を対象に研究を進めたが，児童の情報を収集する力を更に高めるために，中・高学年段階での指導方法などを研究していく必要がある。児童のキャリア発達段階を踏まえ，小学校６年間を通して情報を収集する力を高める指導計画を作成し，実践していきたい。

【注】

(1) 関西大学初等部（2012）：『関大初等部式　思考力育成法』株式会社さくら社pp.49-51に詳しい。

【引用文献】

1)　文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2014）：『キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書』実業之日本社 p.33

2)　中央教育審議会（平成23年）：『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf p.16

3)　広島県教育委員会（平成27年）：『平成27年度広島県教育資料』 p.90

4)　波頭亮（2004）：『思考・理論・分析―「正しく考え，正しく分かること」の理論と実践―』産業能率大学出版部 p.153